



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

Acquisition of Numerical Classifiers in Children with Hearing Impairments : From the Viewpoint of the Characteristics of the Object and the Prototypicality of the Biological Category

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-03-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 澤,隆史, 大鹿,綾, 村尾,愛美, 相澤,宏充, 林田,真志, 新海,晃 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00173570

聴覚障害児童における助数詞の獲得

— 対象となる事物の特徴と生物カテゴリーの典型性の観点から —

澤 隆史*¹・大鹿 綾*²・村尾 愛美*³・相澤 宏充*⁴・林田 真志*⁵・新海 晃*⁵

発達障害学分野

(2021年9月13日受理)

1. はじめに

助数詞は生物や事物などの数を数える際に使用される接辞であり、生物と非生物の違い、事物の大きさや形状、量などの違いに応じて様々な助数詞が使用される。それ故、数えられる対象の特徴に応じた助数詞は、概念やカテゴリー形成の発達に伴って獲得されることが報告されている。例えば内田・今井(1996)は、幼児の助数詞の獲得について生物カテゴリーの形成との関連から検討し、典型性の高い生物事例の方が助数詞の獲得が早いこと、生物の種類や大きさに応じた助数詞(「頭」「羽」等)が遅れて発達すること等を報告している。また佐藤・針生(2006)は、数えられる対象が動物か非動物かによる助数詞の違いについて、幼児の理解における発達を検討している。その結果、動物と非動物といった存在論的カテゴリーの違いに応じた正しい助数詞の獲得は、年長児段階で可能になることを示している。

これまでの研究から、助数詞の獲得は2歳頃から始まり、その付与に関するルールの獲得が幼児期を通じて徐々に進むことが示されているが(仲, 1997)、日本語習得に困難を有しやすい聴覚障害児の場合、助数詞の獲得においても相応の困難を有することが考えられる。聴覚障害児における助数詞の獲得については、音声入力制限による影響という観点から、音便化や連濁といった語形変化の理解に着目した研究が行われている。濱田(2010)は、聴覚障害を主たる対象とする特別支援学校(以下、聾学校とする)小学部の児童を

対象に、数によって読み方が異なる「匹」「分」「杯」などの助数詞の読みの獲得と聴力レベルとの関係について検討している。その結果、連濁のルールの獲得は子どもの聴力レベルと中程度の相関を有することや、聴力レベルが100 dBを超える重度障害の子どもでは正答率が60%程度にとどまっており、助数詞の読みにおける困難が示唆されている。

濱田(2010)では、重度の聴覚障害を有する子どもにおいても、学習を通じて連濁のルールの獲得している例のあることが報告されている。また手話を用いる聴覚障害幼児では、指文字による助数詞の表出が認められる例が報告されている(鳥越・武居, 2019)。しかし聞こえる幼児を対象とした研究のように、種々の助数詞の獲得を数えられる事物等の概念やカテゴリーとの関連から検討したと研究は十分になされていない。聴覚障害児の概念やカテゴリー形成に関しては、国内外の研究を通じて様々な特徴や困難が指摘されており(森・都築, 2004)、助数詞の獲得についても数えられる事物等の特徴や、カテゴリーにおける典型性の違いが影響すると考える。

本研究では、数えられる事物の特徴や「生物」カテゴリーにおける事例の典型性の違いが助数詞の獲得に及ぼす影響に着目し、聴覚障害児の助数詞の獲得について検討することを目的とした。

* 1 東京学芸大学 特別支援科学講座 発達障害学分野 (184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1)
* 2 東京学芸大学 特別支援科学講座 支援方法学分野 (184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1)
* 3 東京学芸大学 総合教育科学群 特別支援教育教室 (184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1)
* 4 福岡教育大学 特別支援教育ユニット (811-4192 福岡県宗像市赤間文教町1-1)
* 5 広島大学大学院 人間社会科学部 特別支援教育学領域 (739-8524 広島県東広島市鏡山1-1-1)

2. 方法

2. 1 対象児

聾学校小学部に在籍する低学年から高学年の児童39名(2年:8名, 3年:6名, 4年:4名, 5年:8名, 6年:13名)とした。対象児の良聴耳の平均聴力レベルの平均は, 95dB(範囲:57~129dB)であった。

2. 2 課題

助数詞の部分を空欄にした文を提示し, 適切な助数詞を記述させる課題を実施した。課題に使用する助数詞を選定するにあたって, 予備調査として大学生71名を対象に, 26種類の助数詞について数えられる事物等を自由産出させる課題を実施した。大学生71名をグループA(36名)とB(35名)に分け, それぞれのグループに対し13種類の助数詞を提示し, その助数詞によって数えられる事物等を筆記により産出させた。予備調査の結果, 産出される事物数の平均が2以上の助数詞13種類に, 「~皿」を加えた計14個の助数詞を選定した。「~皿」については, 表1に示したように, 数えられる事物の特徴に応じたカテゴリ間で課題数をそろえること, 対象児にとって既習の単語であること等を考慮して選定した。14種類の助数詞は, 数えられる名詞が「生物」・「非生物」のカテゴリに分類され, さらに「非生物」については「個数」「量」「形状」によって分類された。

課題として, 選定した助数詞ごとに2問ずつ, 計28の問題文を作成した。なお「生物」カテゴリの問題については, 内田・今井(1996)を参考に, 数えられる生物の典型性が高い事例と低い事例を用いた問題を1問ずつ作成した。問題文は, 聾学校児童の文法力や語彙力を考慮して, すべて3~5単語で構成した。また助数詞で数える数としては, 1~10の数を用いた。

使用した助数詞と数えられる名詞, および問題文の例を表1に示した。

2. 3 手続き

課題はワークシートによって, 小集団ごとの一斉テスト形式で実施した。ワークシートは表紙を含めて, 4ページで構成されており, 対象児の読みの力を考慮して問題に使用した漢字にはすべてふりがなを付した。実施にあたって, はじめに「次の文の()の中に, 正しいことばを書いてください」と教示するとともに, 問題の例を提示して回答方法を確認した後, 本課題に移った。

3. 結果

3. 1 学年群による成績の差異

各学年の対象児数が少ないことから, 対象児を低中学年(2~4年生:18名)と高学年(5~6年生:21名)の2群に分類し, 各群の平均正答数を求めて図1に示

表1 課題に使用した助数詞と問題の例

カテゴリ	助数詞	数えられる名詞	問題文の例
生物	人	(典型性高) 子ども	子どもが5 () います。
		(典型性低) ウルトラン	
	羽	(典型性高) すずめ	動物園でペンギンを4 () 見ました。
		(典型性低) ペンギン	
	匹	(典型性高) 犬	わたしは犬を2 () っています。
		(典型性低) へび	
	頭	(典型性高) ぞう	くじらが2 () 泳いでいます。
		(典型性低) くじら	
個数	個	りんご, つみき	りんごを3 () 買いました。
	台	車, テレビ	車が3 () とまっています。
	着	洋服, ドレス	洋服を2 () 買いました。
量	皿	スパゲッティ, オムライス	お昼にオムライスを2 () 食べました。
	杯	ジュース, ごはん	ジュースをコップで2 () 飲みました。
	箱	キャラメル, 段ボール	荷物の入った段ボールが4 () あります。
形状	冊	本, ノート	本を2 () 読みました。
	本	えんぴつ, かさ	赤いえんぴつを4 () 買いました。
	枚	プリント, お皿	お皿が2 () われてしまいました。
	粒	お米, たね	ゆかにお米が1 () 落ちていました。

した。なお、回答の正誤の判定にあたっては、漢字と仮名文字のいずれで回答してもよいこととし、さらに音便や連濁が誤っている場合でも、意味的に正しい助数詞を回答していればすべて正答と見なした(例:「1びき」,「3びき」等の記述も正答と見なす)。図1に示したように、高学年の正答数は低中学年よりも顕著に高かった。両群間の正答数を比較するためにt検定を行った結果、有意差が示れた($t=2.69, df=37, p=0.0106, g=0.864$)。

次に、「生物」カテゴリにおける助数詞について、数えられる事例の典型性ごとに各群の平均正答数を求めて、図2に示した。図2に示したように、いずれの群でも典型性の高い事例において、助数詞の正答数が高かった。学年群(2)×典型性(2)の二要因混合計画分散分析を行った結果、群と典型性のいずれの主効果とも有意であった(群: $F(1.36)=6.63, p=0.0143, \eta_p^2=0.156$ 典型性: $F(1.37)=14.16, p=0.0006, \eta_p^2=0.283$)。なお交互作用は有意でなかった。以上の結果より、生物を数える助数詞の獲得において、事例の典

型性が影響することが示された。

3.2 各助数詞の成績

各助数詞の平均正答数を学年群ごとにもとめて、図3に示した。図3に示したように、数えられる事物等のカテゴリ間、およびカテゴリ内で、正答数に多寡があることがわかる。いずれの学年群でも、正答数が1点以上であった助数詞は「人」「匹」「個」の3種類であった。一方、いずれの学年でも1点以下の助数詞は、「羽」「頭」「着」「皿」「杯」「箱」「粒」であり、「量」カテゴリの助数詞はすべて正答数が顕著に低い傾向が示された。

各助数詞における高学年と低中学年の平均正答数の差を求めて、表2に示した。表2では、低中学年の平均正答数が高い助数詞を上から順に示している。低中学年-高学年間の正答数についてt検定を行った結果、有意差あるいは有意傾向が示された助数詞は、「匹」「本」「羽」「頭」「粒」「皿」であった。

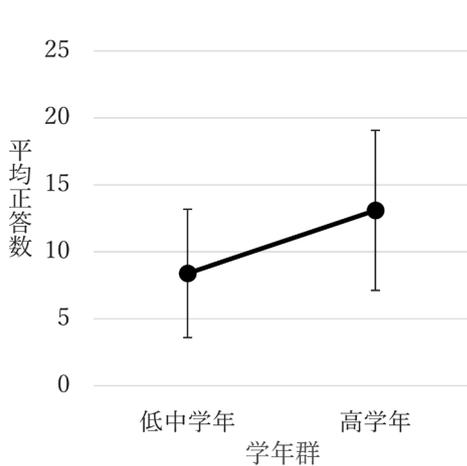


図1 各学年群の平均正答数 (縦線は、1標準偏差)

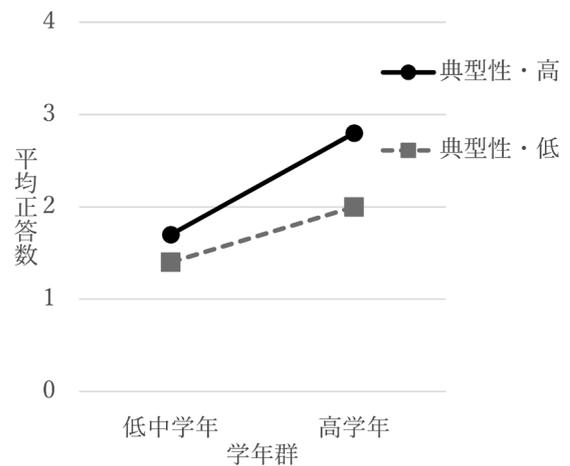


図2 生物の典型性ごとの平均正答数

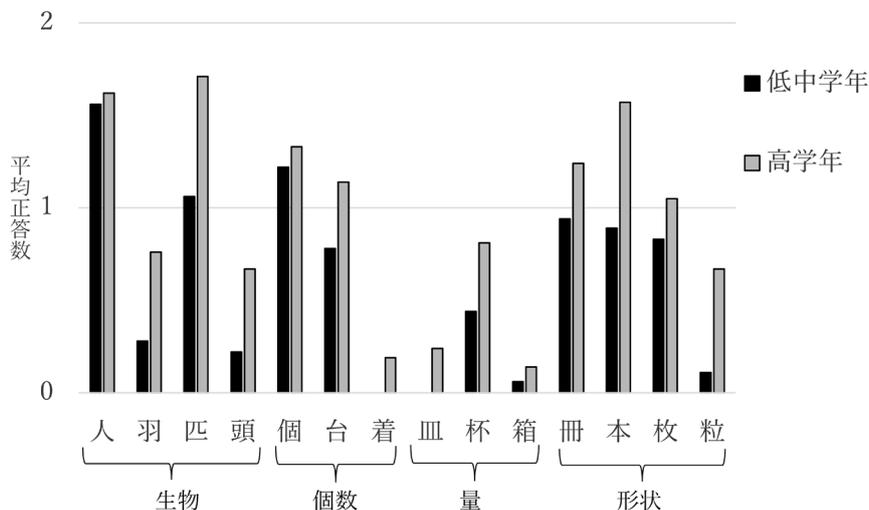


図3 各助数詞の平均正答数

表2 各助数詞における高学年と低中学年の正答数の差

低中学年の正答率	助数詞	カテゴリー	高学年-低中学年
1点以上	人	生物	0.06
	個	個数	0.11
	匹	生物	0.65*
0.5点以上1点未満	冊	形状	0.24
	本	形状	0.68**
	枚	形状	0.22
	台	個数	0.36
	杯	量	0.37
0.5点未満	羽	生物	0.48*
	頭	生物	0.45+
	粒	形状	0.67*
	箱	量	0.14
	着	個数	0.19
	皿	量	0.24+

** : <.01 * : <.05 + : <.10

3. 3 助数詞の誤り

対象児の誤答を「助数詞」「助数詞以外」「無回答」の3種類に分類し、それぞれの割合(%)を学年群ごとに図4に示した。図4に示したように、いずれの群でも「助数詞」を記述した回答が多かったが、低中学年では「無回答」の割合が高学年と比較して顕著に高かった。各種類の比率について比較するために χ^2 検定を行った結果、有意差が示された($\chi^2=38.54, df=2, p=0.000, \omega=0.283$)。残差分析の結果、高学年において「助数詞」の比率が有意に高く、低中学年において「無回答」の比率が有意に高かった(調整された残差 助数詞: 5.042, 無回答: 5.855)。

次に、誤った助数詞を記入した回答について、数が

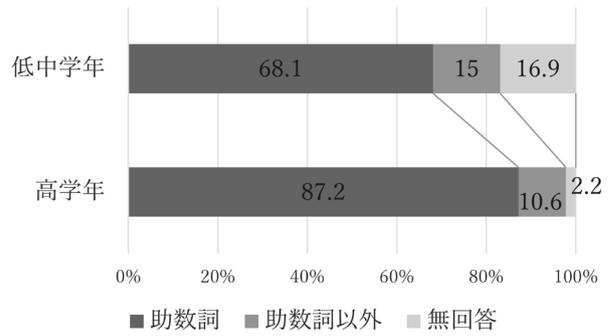


図4 誤答の種類別割合 (数値は%)

多かった上位2つの助数詞とその使用数を助数詞ごとにまとめて、表3に示した。ここでは、音便の誤りや漢字・仮名の表記の違いは考慮せずにカウントした(例:「ひき」「びき」「びき」はいずれも「匹」と見なす等)。表3に示したように、「生物」カテゴリーの助数詞については、同じカテゴリーの助数詞を記述する例が多かった(例:羽→匹, 匹→人, 頭→匹)。一方、「個数」「量」「形状」のカテゴリーについては、いずれの助数詞についても「個」または「つ」を記述する例が多かった。また衣服の数を示す「着」については、いずれの群でも「枚」を記述する例が顕著に多かった。

衣服を数える際に、「着」ではなく「枚」といった助数詞を用いることは一般的であると考えられる。また「個」「つ」といった汎用性の高い助数詞については、事物等の種類や形状にかかわらず日常的に使用されることも多い。そこで大学生3名を対象に、本研究での正答以外の助数詞を用いた回答について、日常

表3 誤答の中で多かった助数詞

カテゴリー	正答の助数詞	記述数の多かった助数詞 (上位2語)	
		低中学年	高学年
生物	人	個 (3), 本 (1)	個 (3), 本 (2)
	羽	匹 (17), 個・本・人 (2)	匹 (19), 本 (3)
	匹	人 (5), 個 (4)	個・つ・本 (2)
	頭	匹 (16), 個 (3)	匹 (20), 個 (3)
個数	個	本 (4), つ (3)	本 (7), つ (4)
	台	個 (8), 本 (2)	本 (4), 個 (3)
	着	枚 (12), 個 (8)	枚 (13), つ (8)
	皿	個 (15), 本・つ (3)	個 (17), つ (11)
量	杯	個 (15), 本・つ (2)	個 (9), 本 (6)
	箱	個 (18), 本 (7)	個 (27), つ (4)
	冊	本 (7), 個 (4)	本 (9), 枚 (3)
形状	本	個 (9), つ (2)	個 (4), つ (3)
	枚	個 (4), 皿 (3)	皿 (7), 個 (5)
	粒	個 (18), 本 (4)	個 (18), つ (3)

()内は回答数。同数の助数詞は“・”で続けて表示した。

表4 助数詞以外の誤答

カテゴリー	正答の 助数詞	記述されたことば	
		低中学年	高学年
生物	人	いす	—
	羽	と, みず	も, を
	匹	いぬ, み	—
	頭	いか, およ	を
個数	個	か, こか	べ
	台	か, き, くるま	車, な, を
	着	か	を
	皿	おま	を
量	杯	の,	を
	箱	か, にもつ	も
	冊	か	を
形状	本	あか, か,	が
	枚	せんせい,	いま, を
	粒	こめ, みま	たわ, を

“—”は、該当する回答なし。

的に使用されている表現として容認できるか否かを判断させた。3名中2名が容認可と判断した回答数は、低中学年で16、高学年で18あり、それぞれ全回答数の3.17%、3.06%を占めた。

次に、「助数詞以外」のことばで記述された回答をまとめて、表4に示した。表4に示したように、特に低中学年では、「いす」「みず」「いか」「くるま」「にもつ」「せんせい」など、問題文で使用した名詞を記述する例が多かった。一方、高学年では「が」「を」といった格助詞と判断される語を使用する例がみとめられた。

4. 考察

4. 1 助数詞の獲得と概念獲得との関連

3. 1に示したように、低中学年と高学年の間で、平均正答数を比較した結果、高学年の正答数が有意に高いことから、助数詞の獲得における発達的变化が示された。しかし、高学年でも平均正答数は28点満点中14点に達しておらず、正答率で50%を下回る結果となった。この結果より、聴覚障害児においては数えられる事物等の違いに応じて、適切な助数詞を用いることに相応の困難を有することが示された。各助数詞の正答数を比較すると、「生物」カテゴリーの助数詞では、ヒトを数える「人」、小動物を数える「匹」の正答数が高いのに対し、「羽」「頭」のように、鳥類や大型の動物を数える助数詞については成績が低いことから、生物の種類や大きさの違いに応じた使い分けが困難で

あることが推察される。また、「形状」カテゴリーの「本」や「個数」カテゴリーの「個」の正答数が高いことから、生活上身近な事物を数える助数詞や包括的に使用できる助数詞の獲得が先行することが示された。これらの結果は、内田ら（1996）が幼児を対象とした研究の結果と同様であり、助数詞が事物等に関する知識や概念の獲得と並行して獲得されることを示唆している。各助数詞について、低中学年と高学年の正答数を比較すると、「匹」「本」「羽」「頭」「粒」「皿」において有意差が示された。「匹」「本」については低中学年においても比較的正答が多く、学年が上がるに従って理解が定着してくることが考えられる。一方、「羽」「頭」「粒」については低中学年で正答数が顕著に低く、生物の大きさや事物の形状の違いに応じた助数詞の獲得が、高学年以降に進むことが示唆された。

次に、「生物」カテゴリーの助数詞について、数えられる事例の典型性による正答数の差異を分析した結果、いずれの学年群でも典型性が高い事例の方が、正答数の多いことが示された。この結果も、内田・今井（1996）の結果と同様であり、助数詞の獲得においては、数えられる事例の典型性が影響することが示された。さらに内田・今井（1996）は、「匹」と「頭」の区別が難しい幼児に対して指導的な働きかけを行うことによって、助数詞の獲得において「複数の事例を同一助数詞を付けて数えるという経験」が必要であること、「助数詞の付与範囲を定めるためには知覚的次元への着目が不可欠」であることを示している。本研究の結果や内田らの指摘は、聴覚障害児における助数詞の獲得を促す上でも重要であると考えられる。特に聴覚障害児の場合、生物カテゴリー階層などにおける上位-下位概念の構造の獲得（井坂, 2000）や、カテゴリーを柔軟に組み替えることの難しさ（澤, 2007）などが指摘されており、本研究で示したように「量」カテゴリーの助数詞や、「着」「粒」といった対象となる事物が限定される助数詞の成績が顕著に低いことから、事物等の典型性や知覚的な類似性、様々な事物を数える経験などに基づいた指導の工夫が必要であろう。助数詞などの日本語を指導する際も、概念形成やその操作に関する認知面での支援が求められると考える。

4. 2 助数詞の誤りからみた聴覚障害児の日本語獲得

3. 3に示したように、すべての誤答のうち低中学年の約7割、高学年の約9割が“助数詞”を回答しており、事物を数える際に助数詞を付与するというルールについては、概ね理解されていることが示唆された。

また「生物」を数える際の誤りとして「頭」や「羽」の代わりに「匹」が多く使用されていた。この結果から、存在論的カテゴリーの違い(佐藤・針生, 2006)に基づいて「生物」を数える際に特定の助数詞を用いることは理解されているが、4. 1でも述べたように、生物学的カテゴリーの違いや生物の大きさに応じて助数詞を使い分けることが困難であることが示された。「生物」以外のカテゴリーについては、誤った助数詞として「個」や「つ」を用いる例が顕著に多かった。「個」や「つ」は事物を数える時に頻用される包括性の高い助数詞であることから、適切な助数詞が分からない場合に、包括性の高いことばが使用されやすいことが考えられる。同様の傾向は、動詞を対象とした左藤・四日市(2004)や左藤・相澤・四日市(2011)、澤・新海(2020)の研究でも指摘されており、日常的な経験の不足や語彙量の不足、語彙的ネットワーク形成の不十分さなどから、単語同士の意味関係を見いだすことや適切なことばの想起・使用に困難のあることが推察される。

「助数詞以外」のことばを記入した誤答は、それぞれ低中学年で15%、高学年で10.6%であった。これらの回答の内容について分析した結果、低中学年では、「いす」「みず」「くるま」「にもつ」「せんせい」「あか」のように問題文で使用されている名詞の記述、「およ」のように「泳ぐ」という動詞の一部を記述した例などが多かった。また「くじらが・・・泳いでいる」という問題で「いか」と記述した例のように、「くじら(鯨)」→「いか(烏賊)」という連想に基づいて回答していることが推察された。聴覚障害児においては、言語力を評価する課題を実施した際、問題文等で使用されている表現をそのまま回答するといった方略を用いる場合のあることが報告されている(中村, 1997)。助数詞を記述した誤答においても、本を数える際(冊)に「本」、お皿を数える際(枚)に「皿」を使用する例がみられたことから、課題が要求している回答の意味を十分に理解できず、問題文を探索して視覚的に認識できたことばを使って回答するという特有の方略を用いていることが推察される。一方、高学年においては「が」「を」「も」などの格助詞とみなされる語を記述する例が多かった。格助詞の理解や産出を求める言語課題は、聾学校の授業やテスト、練習などにおいてしばしば行われており、本研究で用いた穴埋め課題に対してもそのような経験に基づいて回答したのかも知れない。この点については、明確な考察が難しいが、言語理解・産出に関する課題が多く課されるという聾学校での学習経験が影響した可能性が考えられる。

5. まとめ

本研究の結果から、1) 聴覚障害児において助数詞の獲得に相応の困難があること、2) 数えられる生物の典型性が助数詞の獲得に影響すること、3) 数えられる事物等に対して限定的に使用される助数詞の獲得が難しいこと、4) 適切な助数詞が分からない際に、汎用性の高い助数詞を用いたり特有の方略を利用して回答すること、などが示された。一方、本研究では聴覚障害児を対象とした比較を行っていない点や、各学年の対象児の数が限定されている点など、聴覚障害児の助数詞の獲得における発達の様相を検討する上で更なるデータの収集や分析が必要であると考えられ、今後の課題となる。

付記

本研究は、令和3年度科学研究費(基盤研究B)(課題番号18H01039)の助成を受けた。本研究の一部を、日本特殊教育学会第59回大会にて報告した。

文献

- 濱田豊彦(2010) 聴覚障害児の序数心獲得と聴力との関係に関する一研究. 東京学芸大学紀要総合教育科学系, 61, 403-407.
- 井坂行男(2000) 聾学校児童生徒の概念の獲得について. ろう教育科学, 41, 179-190.
- 森智美・都築繁幸(2004) 聴覚障害児の概念発達研究に関する文献的考察. 障害者教育・福祉学研究, 1, 59-70.
- 仲真紀子(1997) 助数詞の獲得における認知発達, 言語環境, そして文化の影響. 千葉大学教育学部研究紀要教育科学編, 45, 1-6.
- 中村真理(1997) 聴覚障害児の文章読解力について. 東京成徳大学紀要, 4, 107-113.
- 左藤敦子・四日市章(2004) 難聴児における動詞の産出傾向—文脈による意味の限定の観点から—. 特殊教育学研究, 41, 195-203.
- 左藤敦子・相澤宏充・四日市章(2011) 聴覚障害児における心的動詞の産出の特徴. 障害科学研究, 35, 109-119.
- 佐藤賢輔・針生悦子(2006) 幼児における助数詞の理解: 存在論的カテゴリーに注目して. 発達心理学研究, 17, 272-281.
- 澤隆史(2007) 聴覚障害幼児におけるカテゴリ化の特徴について—カテゴリの種類と事例選択の関連—. 東京学芸大学紀要総合教育科学系, 58, 315-322.

澤, 他: 聴覚障害児童における助数詞の獲得

澤隆史・新海晃 (2020) 聴覚障害児における動詞の使用に関する一考察—意味の限定性との関連から—. 東京学芸大学教育実践研究, 16, 141-146.

鳥越隆士・武居渡 (2019) 第一言語として手話を獲得しつつあるろう児はどのように日本語を学んでいるのか?. 手話学

研究, 28(1),1-19.

内田伸子・今井むつみ (1996) 幼児期における助数詞の獲得過程—生物カテゴリーの形成と助数詞付与ルールの獲得—. 教育心理学研究, 44, 126-135.

聴覚障害児童における助数詞の獲得

— 対象となる事物の特徴と生物カテゴリーの典型性の観点から —

Acquisition of Numerical Classifiers in Children with Hearing Impairments:

From the Viewpoint of the Characteristics of the Object
and the Prototypicality of the Biological Category

澤 隆史・大鹿 綾・村尾 愛美・相澤 宏充・林田 真志・新海 晃

SAWA Takashi*¹, OSHIKA Aya*¹, MURAO Aimi*¹, AIZAWA Hiromitsu*²,
HAYASHIDA Masashi*³ and SHINKAI Akira*³

発達障害学分野

Abstract

The purpose of this study was to examine the effects of differences in the characteristics of countable objects and prototypicality in biological categories on the acquisition of numerical classifiers in children with hearing impairments. Thirty-nine children enrolled in an elementary class of school for the deaf were given the task of writing the appropriate classifier in the blank of presented sentences. The results of this study suggest that 1) children with hearing impairments have difficulties in acquiring classifiers, 2) the prototypicality of the cases in biological category affects their acquisition of numerical classifiers, and 3) they have difficulties in acquiring classifiers that are used in a limited way according to the characteristics of things being counted, and they respond by using general-purpose classifiers or unique strategies.

Keywords: children with hearing impairments, numerical classifier, category, prototypicality

Department of Development Disabilities, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan

要 旨

本研究では、聴覚障害児童を対象にして、数えられる事物の特徴や生物カテゴリーにおける典型性の違いが助数詞の獲得に及ぼす影響について検討することを目的とした。聾学校小学部に在籍する児童39名に対し、提示した文の空欄に適切な助数詞を記述させる課題を実施した。本研究の結果から、1) 聴覚障害児の助数詞の獲得に困難があること、2) 生物カテゴリーにおける典型性が助数詞の獲得に影響すること、3) 数えられる事物の特徴に応じて限定的に使用される助数詞の獲得が難しく、汎用性の高い助数詞を用いたり特有の方略等を

* 1 Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan)

* 2 Department of Special Education, Fukuoka University of Education (1-1 Akamabunkyo-machi, Munakata-shi, Fukuoka 811-4192, Japan)

* 3 Graduate School of Education, Department of Special Needs Education, Hiroshima University (1-3-2 Kagamiyama, Higashi-Hiroshima-shi, Hiroshima 739-8511, Japan)

利用して回答すること，などが示唆された。

キーワード：聴覚障害児，助数詞，カテゴリー，典型性

